



Red Hat OpenStack Platform 16.2

Service Telemetry Framework リリースノート 1.3

Service Telemetry Framework 1.3 リリースの詳細

Red Hat OpenStack Platform 16.2 Service Telemetry Framework リリース ノート 1.3

Service Telemetry Framework 1.3 リリースの詳細

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Service_Telemetry_Framework_Release_Notes_1.3.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、Service Telemetry Framework の本リリースにおける主な機能、機能拡張、および既知の問題について概説します。

目次

前書き	3
多様性を受け入れるオープンソースの強化	4
第1章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの概要	5
1.1. 製品サポート	5
第2章 最も重要な新機能	6
第3章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの情報	7
3.1. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3	7
3.1.1. 機能拡張	7
3.1.2. リリースノート	7
3.1.3. 非推奨の機能	8
3.1.4. 廃止された機能	8
3.2. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.1 メンテナンスリリース (2021年7月19日)	8
3.2.1. バグ修正	9
3.2.2. 機能拡張	9
3.2.3. リリースノート	9
3.3. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.2 メンテナンスリリース (2021年10月5日)	10
3.3.1. バグ修正	10
3.3.2. 機能拡張	10
3.3.3. リリースノート	10
3.3.4. 非推奨の機能	10
3.3.5. 廃止された機能	11
3.4. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.3 メンテナンスリリース (2021年11月10日)	11
3.4.1. バグ修正	11
3.4.2. リリースノート	12

前書き

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#)をご覧ください。

第1章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの概要

Service Telemetry Framework (STF) の本リリースでは、新機能が提供され、STF に固有の問題が解決されました。

STF は、Red Hat の他の製品からのコンポーネントを使用します。これらのコンポーネントのサポートに関する詳細は、「<https://access.redhat.com/site/support/policy/updates/openstack/platform/>」および「<https://access.redhat.com/support/policy/updates/openshift/>」を参照してください。

STF 1.3 は、デプロイメントプラットフォームとして OpenShift Container Platform (OCP) バージョン 4.6 と互換性があります。

1.1. 製品サポート

Red Hat カスタマーポータルは、Service Telemetry Framework のインストールおよび設定についてのリソースを提供します。カスタマーポータルでは、以下のタイプのドキュメントが利用できます。

- 製品ドキュメント
- ナレッジベースのアーティクルおよびソリューション
- テクニカルブリーフ
- サポートケース管理
カスタマーポータルには <https://access.redhat.com/> からアクセスすることができます。

第2章 最も重要な新機能

以下の機能は、Service Telemetry Framework (STF) の新機能です。

Smart Gateway Operator インターフェース

従来の Smart Gateway は、今後の STF バージョンから削除されました。また、sg-core アプリケーションに新たなプラグ可能なアーキテクチャーが実装されています。管理者は、Smart Gateway Operator を使用して、より柔軟な API インターフェースを介して sg-core をより適切に使用することができます。

第3章 SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK リリースの情報

この Service Telemetry Framework (STF) リリースのサポートされるライフサイクル期間にリリースされる更新についての情報は、各更新に関連するアドバイザリーテキストに表示されます。

3.1. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3

本リリースノートには主に、今回リリースされた Service Telemetry Framework (STF) のインストール時に考慮すべきテクノロジープレビューの項目、推奨事項、既知の問題、非推奨となった機能について記載します。



注記

サービス Telemetry Framework バージョン 1.1 のサポートは、2021 年 6 月 15 日で終了しました。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

[RHEA-2021:2424-01](#)

Service Telemetry Framework のコンポーネントリリース - RPM

[RHEA-2021:2425-02](#)

Service Telemetry Framework のコンポーネントリリース - コンテナイメージ

[RHBA-2021:2478-02](#)

Service Telemetry Framework のコンポーネントリリース - コンテナイメージ

[RHBA-2021:2477-02](#)

Service Telemetry Framework の一般的なコンポーネントリリース - コンテナイメージ

[RHBA-2021:2442](#)

サービス Telemetry Framework バージョン 1.1 のサポートは 2021 年 6 月 15 日で終了しました。

3.1.1. 機能拡張

STF の本リリースでは、以下の機能拡張が提供されています。

[BZ#1959594](#)

今回の更新により、Smart Gateway Operator インターフェースは、sg-core で追加機能をサポートするようになりました。管理者は、Smart Gateway Operator を使用して、より柔軟な API インターフェースを介して sg-core をより適切に使用することができます。

3.1.2. リリースノート

本項では、STF の注目すべき変更点や推奨プラクティスなど、今回のリリースに関する重要な情報を記載しています。お使いのインストールに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

[BZ#1960025](#)

STF 1.3 は infra.watch/v1alpha1 カスタムリソース定義に対応しておらず、infra.watch/v1beta1 をサポートするようになりました。

STF 1.2 では、infra.watch/v1alpha1 インターフェースは非推奨となり、Service Telemetry Operator は infra.watch/v1beta1 への変換を動的にサポートしてきました。STF 1.3 の時点で、このサポートは削除され、infra.watch/v1beta1 のみがサポートされます。STF 1.2 から STF 1.3 にアップグレードす

る前に、infra.watch/v1beta1 に移行するようにしてください。

BZ#1952188

Ceilometer メトリクスは、RabbitMQ バスを介して Red Hat OpenStack Platform (RHOSP) に内部的に配布され、ceilometer エージェントを介して収集され、sg-core 経由で Prometheus のストレージ用に STF に移動されます。

以前のリリースでは、高可用性モードで RHOSP 環境を設定すると、各コントローラーはコントローラー名が含まれるパブリッシャーラベルでメトリックを収集し、送信していました。その結果、検索していた ceilometer メトリックは Prometheus に書き込まれました。

今回の更新により、ceilometer メトリックのパブリッシャーラベルがドロップされ、ceilometer メトリックを1つのラベルセットに折りたたみます。その結果、ceilometer からのメトリックが複数のパブリッシャー全体で破損することはありませんでした。

パブリッシャーラベルに依存する以前のクエリーは機能しない可能性があります。デフォルトの ServiceMonitor オブジェクトを、ServiceTelemetry オブジェクトの **servicemonitorManifest** パラメーターを使用して上書きできます。

BZ#1954722

RHOSP から STF への接続を許可するには、RHOSP13 で **caCertFile** パラメーターが必要です。THT 環境ファイルの **caCertFile** パラメーターをサポートするように RHOSP13 を設定するには、[Service Telemetry Framework 1.3のConfiguring Red Hat OpenStack Platform overcloud for Service Telemetry Framework](#)を参照してください。

3.1.3. 非推奨の機能

これらの機能が非推奨になりました。

BZ#1965464

今回のリリースにより、prometheus-webhook-snmp を使用した SNMP によるアラートの配信が非推奨になりました。

3.1.4. 廃止された機能

以下の機能は、本リリースの STF から削除されました。

BZ#1983662

以前のリリースでは、EnableSTF の使用は、STF の OpenStack 設定の一部でした。本リリースでは、STF の設定がベース設定で行われ、EnableSTF の使用が削除されました。ベース設定の詳細は、https://access.redhat.com/documentation/ja-jp/red_hat_openstack_platform/16.1/html-single/service_telemetry_framework_1.3/index#creating-the-base-configuration-for-stf-assembly-completing-the-stf-configuration を参照してください。

3.2. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.1 メンテナンスリリース (2021年7月19日)

本リリースノートには、本リリースの Service Telemetry Framework (STF) のインストール時に考慮すべきバグ修正および機能拡張が強調表示されています。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

RHBA-2021:2771

Service Telemetry Framework のコンポーネントリリース v1.3.1

3.2.1. バグ修正

以下のバグは、以下の STF リリースで修正されました。

BZ#1979637

今回の更新以前は、sg-core により公開される Ceilometer メトリックにより、仮想マシンインスタンスの ID がラベル値 **host** として公開されるようになりました。その結果、ラベル **host** を使用すると、ノードインスタンスに加えて仮想マシンインスタンスと共にダッシュボードのドロップダウンメニューがオーバーロードされます。

今回の更新により、Ceilometer 仮想マシンインスタンスメトリックが **vm_instance** ラベルを使用して仮想マシンのインスタンス ID を公開し、仮想マシンインスタンス ID が STF ダッシュボードノードインスタンスのドロップダウンメニューに一覧表示されなくなりました。

BZ#1976981

今回の更新以前は、Service Telemetry Framework (STF) 1.3 で Interconnect クラスターをデプロイする際に、ポート 5672 が AMQ Interconnect に対して有効になりませんでした。そのため、管理者は、デプロイメントを検証するための qdstat でクエリーできませんでした。今回の更新により、AMQ Interconnect Operator によって管理される Interconnect オブジェクトのリスナーの一覧にポート 5672 が追加されました。管理者は qdstat を使用して AMQ Interconnect を検証およびデバッグできるようになりました。

BZ#1979378

本リリース以前は、Smart Gateway はデプロイされない空のオブジェクトを提供するために **clouds: {}** というドキュメントを参照します。その結果、Smart Gateway はクリアされず、以下のエラーが Service Telemetry Operator のログに表示されました。

```
"Invalid data passed to loop, it requires a list, got this instead: {}.Hint: If you passed a list/dict of just one element, try adding wantlist=True to your lookup invocation or use q/query instead of lookup."
```

ドキュメントは、**clouds: []** が正しい形式であることを示しており、空のオブジェクトではなく空のリストが渡されるようになります。その結果、Smart Gateway は定義されません。

3.2.2. 機能拡張

STF の本リリースでは、以下の機能拡張が提供されています。

BZ#1975792

今回の更新により、Red Hat OpenShift Container Platform (OCP) 4.6 および 4.7 に Service Telemetry Framework (STF) 1.3 をインストールできるようになりました。

3.2.3. リリースノート

本項では、Service Telemetry Framework (STF) の注目すべき変更点や推奨プラクティスなど、今回のリリースに関する重要な情報を記載しています。お使いのデプロイメントに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

BZ#1940181

STF 1.3 のダッシュボードは、OSP の新しいベース設定で提供されるデータと同期するように再設計されました。これらの場所は STF 1.2 とは異なり、ドキュメントに記載されています。Cloud View および Infrastructure View のダッシュボードは、単一のクラウド環境用に設計されています。

3.3. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.2 メンテナンスリリース (2021年10月5日)

本リリースノートには、本リリースの Service Telemetry Framework (STF) のインストール時に考慮すべきバグ修正および機能拡張が強調表示されています。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

[RHBA-2021:3721](#)

Service Telemetry Framework 1.3.2 のコンポーネントリリース - コンテナイメージ

3.3.1. バグ修正

以下のバグは、以下の STF リリースで修正されました。

[BZ#1979637](#)

このドキュメントでは、Grafana Operator によってデプロイされた Grafana のバージョンが最新のダッシュボード更新と互換性があることを確認できる手順を説明します。管理者は、新しい **graphing.grafana.baseimage** パラメーターを使用して Grafana 8.1.0 以降を実行できるようになりました。これは最新のダッシュボードサンプルに必要です。

[BZ#2008338](#)

ServiceTelemetry マニフェストの **clouds** パラメーターの設定概要には、これまでは Sensubility の設定例がないため、対応する Smart Gateway はデプロイされませんでした。Sensubility サポートの設定を反映するようにドキュメントが更新されました。

3.3.2. 機能拡張

STF の本リリースでは、以下の機能拡張が提供されています。

[BZ#1979642](#)

ドキュメントで参照されるダッシュボードは、複数のクラウドと互換性を持つようになり、管理者が簡単に個々のクラウドを視覚化できるようになりました。

[BZ#1958934](#)

仮想マシンのダッシュボードが更新され、STF 1.3 と連携するようになりました。以前のバージョンでは、**infrawatch/dashboard** リポジトリの **vm-view.json** ファイルは STF 1.3 では機能しませんでした。Grafana Operator によって管理される GrafanaDashboard オブジェクトとしてダッシュボードをインストールすることができませんでした。

3.3.3. リリースノート

本項では、Service Telemetry Framework (STF) の注目すべき変更点や推奨プラクティスなど、今回のリリースに関する重要な情報を記載しています。お使いのデプロイメントに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

[BZ#1989660](#)

STF 1.3 の最新リリースが RHOSP 16.2.1 で動作するように検証されています。

3.3.4. 非推奨の機能

本項には、サポートされなくなった機能、または今後のリリースでサポートされなくなる予定の機能について記載します。

BZ#2002711

以前のバージョンでは、Elastic Cloud on Kubernetes (ECK) Operator は OperatorHub.io CatalogSource からインストールされていました。Service Telemetry Framework v1.3.2 では、ドキュメントは Certified Operators CatalogSource から ECK Operator を使用するよう更新されました。

BZ#2002714

redhat-operators-stf CatalogSource の使用は、Service Telemetry Framework v1.3 のドキュメントから削除されました。これは、v4.5 を超えた OpenShift Container Platform バージョンで利用できない Operator への回避策として AMQ Certificate Manager Operator のコピーをインストールするために使用されます。

AMQ Certificate Operator は、OpenShift Container Platform v4.7 の **redhat-operators** CatalogSource で再び利用可能となり、追加の CatalogSource の使用は不要になりました。

ビルドされた AMQ Certificate Manager v1.0.1 に移行するには、以下の手順を実行します。

1. **redhat-operators-stf** CatalogSource によって提供される既存の AMQ Certificate Manager をアンインストールします。
2. 「Service Telemetry Framework v1.3」で説明されている **redhat-operators** CatalogSource によって提供される新しい AMQ Certificate Manager にサブスクライブします。
3. **redhat-operators-stf** CatalogSource を削除します。

3.3.5. 廃止された機能

以下の機能は、本リリースの STF から削除されました。

BZ#2004142

管理者に必要なアクション項目がないため、Node Tuning Operator に関するドキュメントはドキュメントから削除されました。OpenShift Container Platform は、Service Telemetry Operator によって定義された ElasticSearch をスケジュールする際にノードのチューニングを適切に処理します。

3.4. SERVICE TELEMETRY FRAMEWORK 1.3.3 メンテナンスリリース (2021年11月10日)

本リリースノートには、本リリースの Service Telemetry Framework (STF) のインストール時に考慮すべきバグ修正および機能拡張が強調表示されています。

本リリースには、以下のアドバイザリーが含まれています。

RHBA-2021:4582

Service Telemetry Framework 1.3.3 - コンテナイメージ用のコンポーネントのリリース

3.4.1. バグ修正

以下のバグは、以下の STF リリースで修正されました。

BZ#2011603

今回の更新により、**servicetelemetrys.infra.watch** CRD には **clouds[].name** を英数字 10 文字に制限する検証が追加され、クラウド名に追加の文字が加えられる問題や、名前が長くなりすぎる問題を回避できます。

BZ#1959166

以前のバージョンでは、Elastic Cloud on Kubernetes(ECK)Operator をインストールせずに STF をインストールすると、エラーメッセージ「Failed to find exact match for elasticsearch.k8s.elastic.co/v1beta1.Elasticsearch」が返されていました。このエラーは、存在しない API インターフェースから情報を検索しようとする Service Telemetry Operator が原因でした。今回の更新により、Service Telemetry Operator は ECK 提供の API インターフェースへの要求作成を試行する前に API が存在することを確認します。

BZ#1875854

今回の更新以前は、alert.yamll での CPU 使用率の高いクエリーが無効となっていました。また、rhos-dashboard のグローバルアラートパネルに保留中のアラートが表示されるので誤検出が発生します。つまり、CPU が高いという警告や重要なアラームが誤ってトリガーされたり、CPU 使用率が高いことが検出されても、警告やアラームがトリガーされない場合があります。今回のリリースでは、ホストごとにグループ化された CPU 使用率の合計を計算してその値をホストのコア数で除算することで、CPU アラートクエリーが新しい記録ルールを使用するようになり、CPU 使用率が 0 から 100% の間で使用できるようになります。

3.4.2. リリースノート

本項では、Service Telemetry Framework (STF) の注目すべき変更点や推奨プラクティスなど、今回のリリースに関する重要な情報を記載しています。お使いのデプロイメントに最大限の効果をもたらすために、以下の情報を考慮する必要があります。

BZ#2013268

STF 1.3.3 は、インストールプラットフォームとして OpenShift Container Platform 4.8 をサポートするようになりました。